[illegible]

こうおほくし 并一

哥と詞を名ごきわ

[v. 15]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 15
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

源大七八戈のるまを
もしほれつまびなひし比ほひ（源左遷くす）（三十二）都にも古雨ぐ
ぬぼしなげく人ぬほかりしをさても我此身ぞ
より前あるはひとかるのおもひよそくるしげなり
しが二条のうへ（紫）などものどやかなてさびのれすこ
ゝ後もぬぼつなからぞ罪しかよひなひ川く位（くゐ）を
さりなへるかりのれよそひをもふけのかれよれ
うきふしを時くまつけてあつかひとさらし給ひ
なくさめ給へん。なかくそのかずとも人にもしら
れぞ立別（たちまれ）なひし程のれ有様（ありさま）ともよそのことに
ぬひやるも給へぐのしるのこころくぶさ給ふぐひおほ
かりひさちの家の志（おつむノなすと云く）ハちくみこのうを給ひしぬ事に。

又むひあつふ人もあるされ身まで。いうじうころ
ぼそげなりしを。ぜひ（添た選くす）けぬれことのいでまそ。
（添ノ）とふひ事もふことこえざりしを。いかめしきれ
いきほひまこそごとまもあらずなるきほどれ
れなるけぐりとあぼしこるしかど。（米ノ）まちうけ
給れこもとれをばきまは。大宅のほしのひかりを。
（七夕ノ祭ニすかること）こゝいの水まうつしこゝ心ちして。をぐし給し
程ま。（添ノ）かゝる世のさはぎいでまそ。なべてのようく
あぼしこぐれしまぎれまけぎとふゝぬかこの
心ぎしいぐちけれこゝやうまでとをくおりし
ましまし後（のち）ぶりかへてしもえこぐほきこし給はず。

(末)その名称ほ志げしいなくくもなし給しをさし
月ふりまくほおもれほさびしきれありき夜なり。
ふりさ名げしなどはいで(女げん)やいとくちおしきれ
すくをなりそり。おぼしず神仏のあらされぬへんん
やうなりし此心ぢへほかくうよをぐもひとをいで
かもすりもれなりそりと。ありがくうこなりしを。
おぼるのよれことくいひなげしまるたのむりな
なきれ(末ノ)ありき夜こそうなしそれとつぶやきなげゝ。
(地)さりるほなりつきこりしあるるのさしごろハ。
いふかひなきさびしさまめなれてをぐしくまふれ。
中くすくしよづきてなしひほけり年月ほいと

えべくさひなげくべし。まこしもさてあるもぬ
ごき人ごいなのづらゝ来りつきてありしをこれ
つきぐまさるがひていきちりぬ。女げらのいのち
えぬもありて。月日まさるがひてかうしもれ人
がすくなくなりゆく。もとよりあれたりし。文(ひこちり)の
うちいとゞきろのもとゝ家になりてうとましう
けどをきこゞちまおくろうの急を朝夕に見く
なるしつゝ。人げまこそさやうのもれもきられて
かげくしかれこゝ雨などかしかゝぬ拙ぎ所を
きてやうくうちをあらりし。拙まびしきこと
のこゝかずさしぬまれくのうりてさふふ人ハ

れいとつりなし。ぶぶろどつやうどもれ。おもしろさ
家げんりこれむが。この家（ひとち）のこぶちを心よつけて
ちなち給ひをてんやと。程よつさてあむなつし
よさすりを。さやうまをさせぬて。いとかうもれ（末ノ女ゞろノ付）
おそろしかんぬれすまねよ。おぼしうつろハなん。
うちとまりさふらふ人も。いとこんがうしなど冨
れど。おなかいこじやひとれきておもちんともあり。（末ん付）
いけりよりしかなぞりなきまぎはいかぐをん。かく
おそろしげるあれちてぬれど。おやの此（こ）かげとまり
けり心ちすりふりさきとこうとしまよ。なぐさこてこそ
あれとうちなきつおもほしもかけず。此でうどだも。

いとこぶいまなれたるが。ぢやうまてうりしき紙。
なまま抱のゆへしらんとさへる人。ざうも此えうじて。
ひざとその人がの人はおきせぬると鶏(ぢ)のこさて。
あん内するもそのづらかうまづしきあたりと。
しひあれづりていひくるをれいの女ばらいかぶれ
もんぞこそはよのつ○のことしてとりまぎらし
つゝめまちうきかふあ寸のこゞるしき紙ばくる
もんとする時もあるを。いらじ(未)ういさめなて。詞ことと
しひなてこそしを(ひたり)とを給けめなどてかかるぐ
しき人の家(ひ)のかざりとはなさんなきさ人の所ほい
こぶらんが。衣なるこしくのこまひて。さるひざは

きせ給ひず。いるまさことよそも。とふしひ罪ゆゑ人は
なきは男也。ことばれきうとは禅師（ぜんじ）の君斗（ぞうぞ）ぞ。まれまも
京は出ふ時は。さしのぞきぬべ。それもよまなきゆゑ
めきべくて。おなじ。はうしといふ中にも。こうぎなく。
ひせをもなれこそ聖（ひじり）にもしまして。しげきくさ。よも
ぶ後ぶに。うきいりん物もしより給ひず。かろまゝにあ
さらは庭のおもしえしず。しげきよもぶし行（のき）をあし
そひてあひのぼる。むぐらはよしひんぐしのこうどを。
とぢこめこうぞこれもしそれど。くづれがちなるめぐ
りの垣（かき）をしるうしなどのふとなるしこうこちまて。芸（たう）
友（たう）になれば。ちなちかふ。何げまきの心さへ。ぬぎましき

地
八月の望つきあらかりしせしらうどもく
こうれかし。志もれやどものたちるさいたぶき
ありしなどは。ぞ日のこつづるのつりて。立とまる
げきぐるなるしぞふりこえて衰まいうじこさと
おほりぬきくなどいふひたかり心あるもれも。
おもひや里のさびしそれがまや。此家をぞふかうの
もれるこうすぎてよりこぎりそれぞ。かくいうじこさ
望らやぶるれども。さすがまたんでんの内がりは。
ありしれたつらひかりしぞ。のやくかるかいたらさ
などすう人もなし。ちりはのもれども。まぎるくこと
なきこうりしきれすまねまて。おしくらし給。

こゝ和きゆうこゝ抱ぐらりなどやうのすきひごと
まてこそづれぐともまぎらはしからすまゐを
もちなぐさむりつぎなめれ。さやうのことにこそ
ろ紙そくもれし給ひぐとこのましからねど
とのげらまるいそぐことなきほどハ。ゆゑすじ
こゝろなりふこゝろもしなどもうちしてこそ
つきへハ末葉まつけても。心をなぐさ光ぬべ
かれどおやのもてかしづき給し此心をきての
まゝに世中をつくましき抱まおぼしてまれにも
ことゝよひぬべきれあらりをもさしまなれ給ひず。
ゆゑめきこゝろこゞしあけて。からもりそゝやのさゞ。

くやびめの抽説のゆまりきたるをぞとさくの
まさぐりまれにし給ふることとてもありしき
やうまえりいで髭をも謗人をもわらひ心ゆる
こそこどころもありかれうちしきりむやがえ
こちのくまがえちまどのふくごめるまふことぐもの
めなれたるちまどは、いとすさまじげなるをもあて
おぼめ給ひりくいひきひろげたまふいまれよれ
人のすめる程うちよみ、をてちまひなどいふとは
ちづしくしぬて、こなりける人もなれどずぐなど給
よを給ひずかやうまうりしてぞまれし給ける
仰頂といひしれめれとごぞりしそさしぐろ

罪しかりもとよりまつきたるさやうのなさく乃
人は中々よきひとのまゐまころをひくし思
あがるもおほりなをやむごとなきすぢなるを
うまでおひべきすくもありそれがまや心をこし
なをくしきれをどまぐおりけり（大武ノ如方ん）けがかくを
さりのき夜まで。おれづしたしくおもはれたり
しをいりでかかるよれをしたり。この来をけが
むすめどもれづるひ人になしてしがれ。こころだせ
などのかるびこりなとそあれ。いとうしろやすき
うしろこなるんとせて。（如方詞）とさぐこそにつくしせ給
てれことをしねもうけ給ひしまほしかる人なん

ぬりとゝきてそりこの仏(ぞう)はもつゐまいひもよほ
をど・人(まノ)まいどむ心まほあらで・こゝこちらきれもの
つゝこちれば・さもむつびぬるぬをねしと(大戴ノ小方心)なん
もひけりゆゑほどまかれ(以)家あらじ・だあくなりぬ・
ひすめどもあらべきさ海まゝをきて・ぐりなん
と寸・この君(米)をなをもいざなるんの心ゆくて・ゆゑ(大戴ノ小方詞)
かまかく海かりなんとすゝ心ばそきれ有き海の
つゐましもとつくひ罪ゐどちうきこれゝ仏ゆゑ
程そあれ・いとあるれまうしめくなんなど
ことゝうゞをさ(まノ)しまうけひき給ひ(小方詞)ばあれまく
ことくしや・心ひとのまぬしあゞうともさう

やぶぞらまさしへぬふ人を大(深)ねぬもやむごと
なくしもせきそく給りしなどぞ思ひしうけひかり
地さり程にげまよれ中にゆりされぬて始(深)にかへり
給とおめのしるこのよろぶひにてしちさいぐ我も
いかで人よりさ程にふかきこころざしをあらんぞ
られんとのみ思ひあふ松とて名につけて、さら
にさをもくぶれりをも人の心ぞんを三(深)ぬふに、家に
おぼしきつくさ雨ぐなりゆやうにあまたて
しきほどにさしにせ(未と)いで給はしきこそで月日
へぬいまは(未ん)かぎりなりとしごろあらぬさ雨
なりれさ雨をかなしきいうじきことをしるべしも

もえいづる去るあひ給はるんとねんじにたりつ
れどたひし（民氏）（河原）りりしなどまでよろしびたふまるれ（源ノ）
くらねあしたまりなどするをよそ（来ん）のこゝろべき
なりやうなしりしありのうれりしさは。ゐぬぐ
我身ひとりのこゝろまなれるとおぼしかひなき
世をれと心ぐるそて。けらくなるしかれば。人しれず
ねをのこなきゐふ。大武の山の方。されどよまきは（大武ノ山方ん）
くたつぎなく。人にうきれありさ海を。ずまん
ゐふ人いありなんや。仏ひだりもつゝかゝきをこそ
こちびきよく思ふまゐふなれ。かゝれありさ海にて
たけくよ我おぼし。安（ひさ）となどのおりをし時のまゝに。

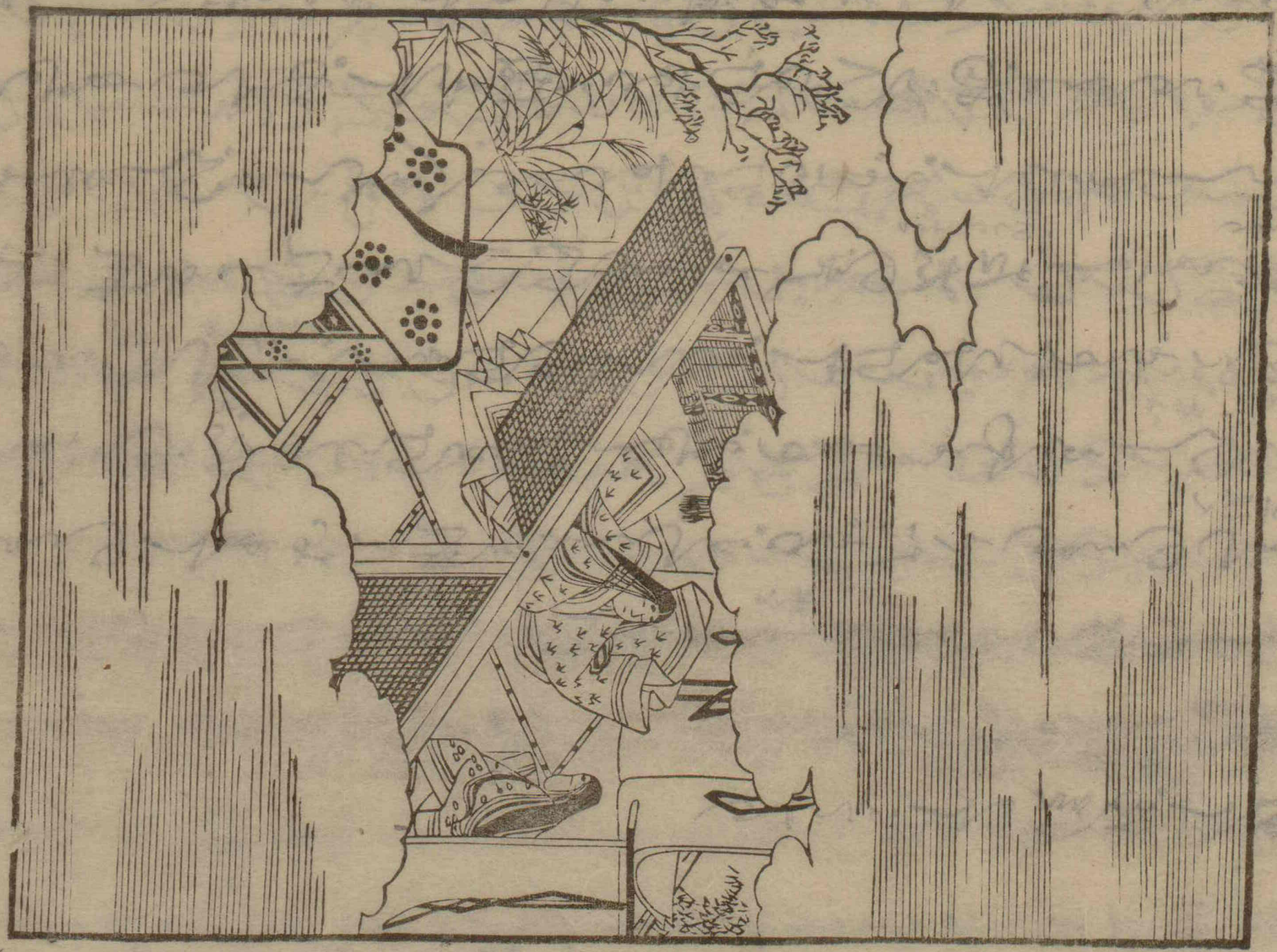
ちゝひぬへるはそろをぞりのひとあしさてとく
いとぐおこがましげまさてなを(付)もおぼしたり。
世のうきときはえぬ山路(ぢ)をそこぶぬなれ。ね
中などいむつしき物とおぼしやるしめど。ひこ
かゝる人はろげまいよりもまてなしきてじなど。
ひとゝとらくいへだむげ(家ノ女ヲ)よくしまくる女がしさ(付)も
なびき給いなん。こけきことをあるまじきは
身をいかるおぼしてかくこそたれそろなんと。
まどきつぶやく侍従もりの大気のおひごろひとうる
らひつきてどぐむべくもあしさりそれが心(侍従付)より仰よ
いでこちてこまりをんがひと心ぐるしきをとて

そぐのしきゐれど、なほ低くかけもなれて、ひさ
しうなり給ぬる人(涼)は、この低かけ給、此うちの内は、
さりともありへてもあげしいづかつねぞあらじ
やはゝ長まうちふるき(ちぎり)を志給しは、我身いうらて
かく志(ます)しれたるまゝそあれ、風のつてまてもまれかく
いうじき有様をきてつけ給ひぐなるしずとふらひ
いで給てんとおしどろ見しかれば、大かたの此家
ぬもおりしよりけはあさましかれど、ほがこしろ
もてもちるきれでしどもなどもとりうしなかき給
ぬず心づよくあるじ夜まてねんじまでて給成(なり)
なりけ(俗)なきぶちまゆとぐ見しきづきうちいとぐ山人の

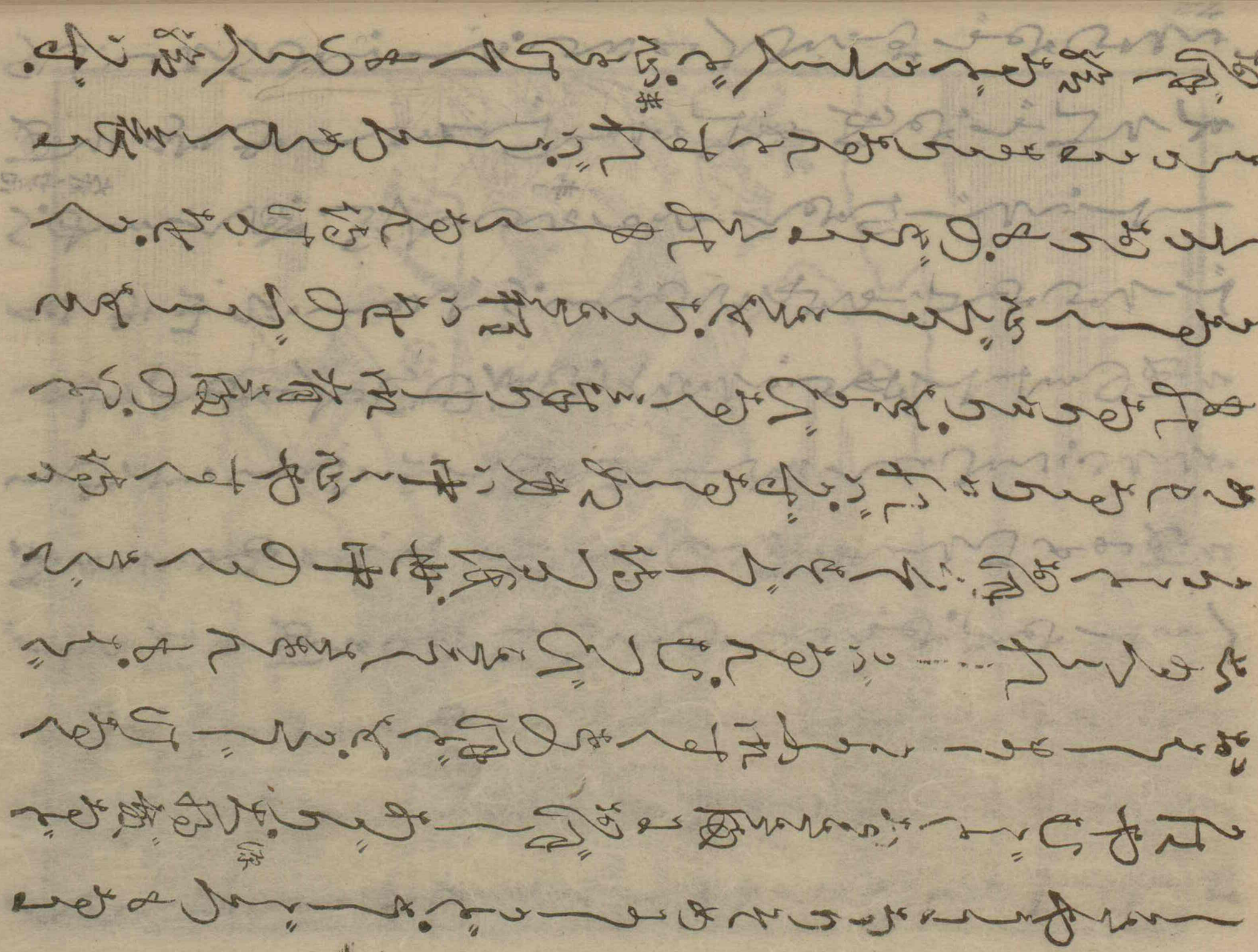
おもきこのことひとりさびしさまさるとこそいへ
哉そぞろなれば おぼろけの人のとはりゆるさまじくべくぞ
まもあらずしくは冬見えしじ いとおもしろう
なれいひさびしきやうなり 冬はなりゆくまゝに
いとゞさびしさまさるちむあはれなるげに(冬ノ)あめすご
し 源語(源)かれとみれば 古説の(此哥ハ明石ノ巻ノ冬之)此れわうの此れ八謙(けう)世中
ゆすりて 源語にもみえるなどはなすべてのはじめ
さびざうゑをそぐれなどこなるひましこそさうらさ恨(うらみ)を
ゑゝを源語かれが(末ノ兄ノあぢりて)このきんじのゑもまりのへりたり。
ゑりまゆなくらまりのそ。(あぢり詞)たかく(源)枕草紙云夜の
此れ八ちうまゝまりて行つるあり。いとうしうりけ

ぶ浄土のかざりなをとしぐいかゆゑしうかもし
ろさしくどもかざりをなんしのへる。佛菩薩乃
変化の身をしそ抱しのふめれいけくのよごり
かゝる世をなどそむまれ給ひんといひてやがて
いでのひぬしずくなるよの人まぬれあるひ
まそかひなさよれ抱ぎをとゞまえ給ひあるを所
ぞ。さそ来んもかゞりつゝなるさこのありさ所を衣な
ぬぼつゝなくてそぐし給ひこゝろうの佛菩薩やと
つゝう元ゆりをげる恨なありとやうくもひなり
給ふ。大威の少分ゆはりまさゝれりれいさしもむつ
びぬを。さそひしそむの心まそ。ぞるべきれさうぞく

などてうじて。よき車にのりて。おもちかしき
ほうりかに。拍せひなげなる面もて。ゆくりもなく
ちしゆきさて。かどなけさすかよりへまろくさびしきと
恨(うぎり)もなし。左右(ひたうみぎ)の戸もよろぼひたうれにかれば。を
のこどもたすけて。とくあけさせぐ。いづれかこの
さびしきやどにもかなしげなる(おと)絵あたする
三徑之(さつ)のうちとたどる。まづうまこれにおもてのうう
しあけたるまゝよ(車を)をこれば。いとぐりしたるしと
ねばしこれど。あさましうすくけたるあてさし
出て。(末ノ如ぐうめのとごと)侍従いでこたり



かたちなどおとろへまかりとしごろいたう
えられどな紙もれさよげによりしあるさ夜
してかうじけなくとともとりうへ(来ニ)の御(大武ノ和方同)
でたちなんことをさなから心ぐましきれあるを
さ夜のうすてまりぐさを仰信のひとへになんとまり
きたるこころうく覚し(つづし)隔のひてれこづらこそあら
さ夜にもわたしを給ひ。このひとをぐにゆりさを給
へとてなんなどうあられげなるさ夜にはとて。
うちもなくべきぞうしされどゆくえちに心をやり
ていと心ちよげなり。故宮(ひたち)おいきしときをのれなば
おもてぶきなりと覚しすてたりしかばとく



ひとうれしきことあれど世にまぬき夜までなり
かはかうながらこそくちもうをめとなん。心得と乃
このうまへバ。げ（小方詞）はちうなん。なぞさるべくれど。いけ
なる身をもてくらくしくつけさ程ねするこづひを
作しぜやあらん。大（源）将殿の門くりこがさ給ちんは
こそはひさうへこ夜のうてなまもなりくへらめとハ。
これもしうハ作れど。こゞいまは音々の文志れ
じ（笑）すめよりほかまきろまけ給ひこもちりなり。
じかしよりすきぐしこれ心まて。お伝ざるとは
かよひ給ける一形ぐ。これなぞしもなれはこゝろ。
ましてかう袖ならなさ夜まで。やぶかしまもぐし

ゆへる人をば。こゝろざしなく。我をこれこゆへるあり
さ國と。君(ぞね)冥加し給ことといとかうくなんあるべきなど
いひしらすりを。げ(赤ん)まと思ぼすもいとかなしくて。
いくぐとなきぬふ。されどうづくべうもあらねば。
(物)よろげまいひいづらひくらして。さらば侍従をぶ
まと。日の暮(くり)りまゝまいそげ。うろ(侍従)あはこ
しくて。なくく(詞)さらがまげかふハかうを見ぬふ。
とくりぢりまゝまゝで侍らん。これさそし給もこと
もりちり。まゝ思ぼしいづらふもさることは侍れば。
あ方ニ理ありとて
なりまこゆふりも心くるしくなんと思ひてきこゆ。
(赤ん)は人さへ打すてくむとすりをうしりしりもあられ

まもおぼせど。いひとぶべきうるもなくて。いと
ねとのこゝけきことまてもれし給。かゝ見るまそへ
のべきこゝなれどろもくおほなれられば。さしへぬる
ありしこゝを給べきもれなくて。我れぞしのおりこり
けるとりあつめて。がくましゆへるが。九尺よが
りまていとこゝらくなるを。おりしげなるもこゝま
いれて。ひかしのろぬえかうのいとかうだしきひ
とけぼぐしてうまふ
末 ゝ母まじきすぢとこれそしうまうづら思乃
かまかけもなれぬる。こゝのこのれぬひをきしことも
ありしかばかひなきもなりれ。こもてくむとこそ

ぶつれうちすてらるゝもことわりなれど。誰(れ)は見
ゆづりてかとうゝめしうなんとて。いそじうなさ給。
この人(侍従)も抱もさてしやらず。(詞)まゝの遺(ゆいごん)云いさしにも
冥しさとぎ。とし。ごろのしのびがたきよれこと紙
をぐし侍つるよ。かく御ぼしぬこちよいざなもれて。
もるかよまゐりあくがるゝことゝて
(侍従)玉かげゝこえてもやまじゆくこちのこむけ
の神(かみ)もかけてちかれ。いのちこそしり侍ゝるど
いふよ。いづくゝうなりぬとつぶやかれて。ごろも
そゝまてひさいづれが。かくりこのこをゝれけり。
(まん)とし。ごろまびけゝもゆきまゐれざりつる人(侍従)の。

くつれぬること紙いと心ぼそうおぼすよ。よる
もちゐらるまじきおいぐさへいでやことりぞ。
いかでかたちとまり給はん。つれらもえそ念(ねん)じ
たつまじかれと。そのが身よつけたるたりどもしむ
いでゝ。とまるまじうさへる紙。人もろくきく(ホノ)おり寸。
霜月(しも地)ばかりに成ぬれば。ゆきあられがちにて。ほか
にはさゆるまもあるを。朝日夕日をふきぐよりもなさ
ひぐらの陰(かけ)に。ふかうけりて。こしの白山さひやら
なる雪のうちに出入(いぞいる)しもぐ人ばなくて。つれぐと
おぼめ給(ホノ)。たりなきことを思ひなぐさめ。なきことにも
ひとまざらしけるに人さへなくて。よるもちりが夜

しさ兄丁のうちもかこりつさびしく抱がるしく
おぼさるかれ夜（源ハ）まはめづらしさまいとゞもれさは
がしされありさ夜まていとやむごとなくおぼさ
れぬ取ごまはづぎともえをとづれ給ひずまして
その人はまだ世まやおもすらんとだろり覚しいづる
おりもあれど、さづ日ぬふべきれ心ざしもいそかで
ありふるまさしかりぬ。卯（う）月がりま茲ちる里をお
もひいで冥しまて、世びて夜いのうへ（紫）まれいと夜さ
こそていで給。日ごろふりつる名（なごり）のあめすうしそく
きて。おりしさほどま月さし出たり。むりしのれ
ありさおぼし出されて。えんなるほどのゆふづく

東にえちの程よろづのことに出ておいするに
うたもなくあれたる家のこぶちしげくまりのやう
なるとすぎ給ひけるさまる松に夜の咲(さね)かくりて月
かげにあらひたる風につさてざとりはふがなる
しくそこくらとあるきかりなりたち菊には
かたりてありしかれば、さし出の人家より柳(やなぎ)もい
たうしぶりて、何いひぢもあらねばたぶれかし
たりしし心ちすることぶちかとおぼすはちやう山家(ひまち)
なりかりいと哀にてとしとぶめさを給ひ前(れい)の惟光(これみつ)は
かるれしのびありきまとられねばさふらひあるも
めしよをて、(河)そくはこひたちの家ぞかしなし、(惟光詞)しろ物と

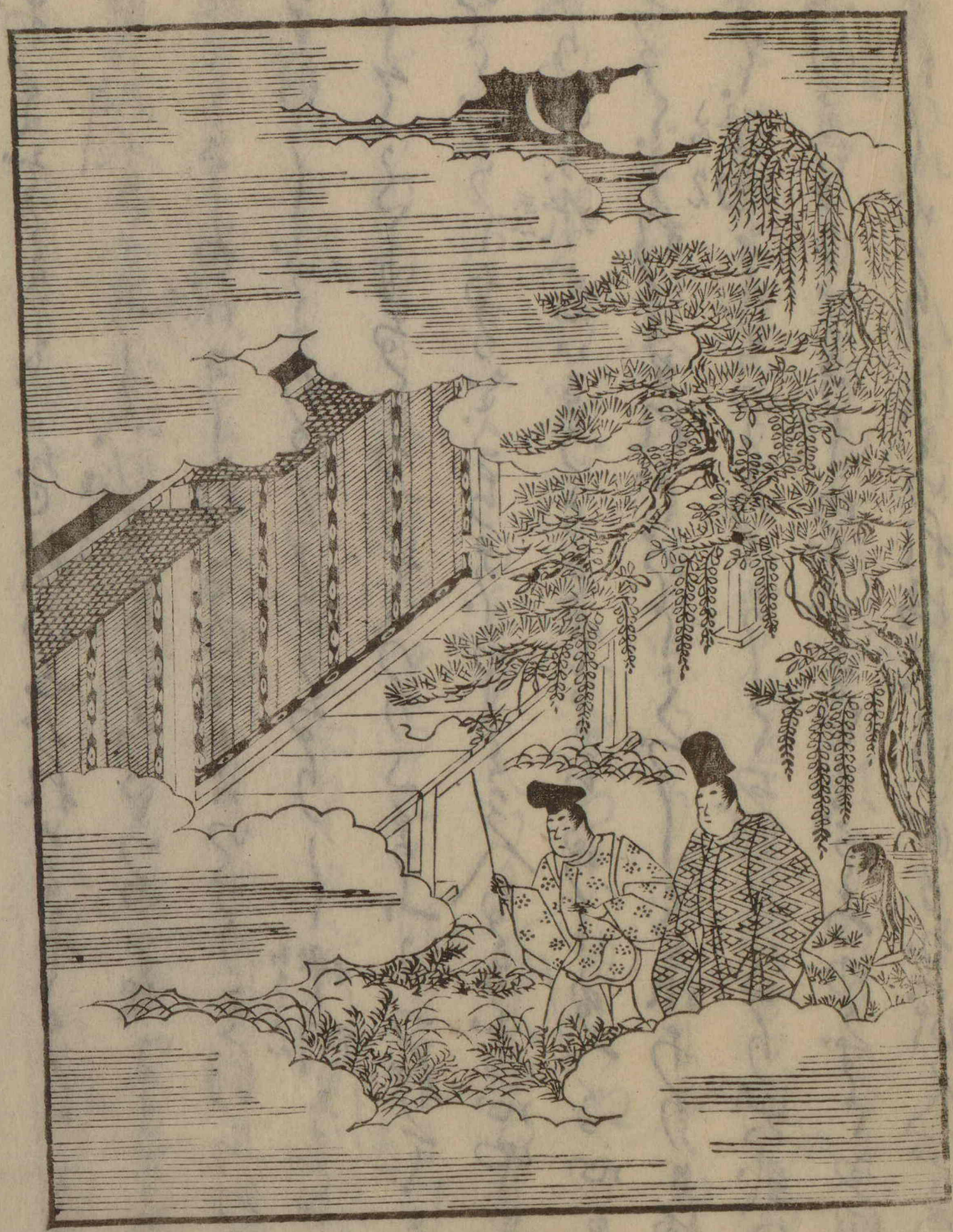
さて白。こゝまありしひとはまぐやたすぐ無ぐらんと
ふしぶべき仮。けぎと抱きんもところをしかるけ
いでまいりてきうそこをよくさづるよりてを
折想(うらぞ)よ。人さぐへしてハをこちらんとの絡。こゝまは
いとゞちがめまさるころまて。けくぐとおもし
けるよ。ひるもの景(ゆめ)よ古家(ひとち)のこしのひそれバ。さめて
いとゞ名殘かるしくおぼしてもりぬれさるひさしれ
もしつるをとしのごもをて。こゝかしこのおまし
ひさけくろもをちどしつゝれいちしずよづさめて
ちさ人をこゝる魚もとのひまちさまあれる
かのさのもづくさへそふも心(池)ぐりしさ程よちんあめり

けるこれこついりて。先ぐらく人の喜(とと)すうらや
とみるに。いさくか人げもを。御されむとてゆき
されこちまこいるれど。人すこげもなき地をとな
て。かへり来る程に。月あるくさしむらまこれば。うう
しかるまぢりあけて。まだれうづく気色なり。まげ
なまこけらる心ち。おそろしくさへおぼゆれど。よ
まてこはづられば。いと(老ぐ)地ありうるとまて。まげ
志まぶさ紙さうさまくてくかれ(詞)はされぞ。なまぐぞと
とふ。なのり(惟光)志て。侍(詞)後の君とこそこえし人に。ゑ
ん給えんといふ。それは(老ぐ詞)はなまなん地し給されど
おぼしつくまじき女なん侍といふ。声(まこ)いさうねび(惟光ぬ)

すぎこれどこゝしおいべとさくしたりたりうち
まいせひよくずかりぎぬすぐるある男の悪びやうにも
てなしてなぐやうなれば、こなるいず必にけるめにて、も
しきる○などの変化にやと見ゆれどちうよりて、
しうまなんうけ成いしまはせきかりしぬれ有様なら
ば、那○男しさきぬべきれ心ざしもてずなんおりしま
すめりし、よひもゆきすぎずてにとまらをぬへるを
いかに男しさきんうしろやすくをといへば、必ず打つひ
て、かたらを給れ有様なるにばかる浅第が原をうゐひ
給ひでい侍なんやうぐをし斗て男しさきぬへし、年
へさ人の心にもぐらひあらじとのこめづらなるら後

そいこまりすぐし侍れとやくらづしいでくとそすず
がくりもしのべきがむつ（惟光心）しくれば（詞）よしくまづくなん
と四九しさきんとて来りぬ（源詞）などかいと久しかりつるいかに
ぞ芳（むく）の袍（あと）もこしぬよりもぎのしげさかれなどの給へば（惟光詞）しろ
しろなんこどりよりて侍つる侍従がをもの。かねといひ
侍しおいべなん。かいらぬ声（五）まで侍りつると有様四九也。
いうじう（源心）衣にかろしげきなるまなまじちしてすぐ
し給へん。今までとはざりけるよと。我此心の情（なさけ）なさ
も見ししろいかぐすべき（詞）。かろしのびあるしさを
かるかるべきを。かろついでなしでいえるちよしじかい
らぬ有様なるしば。げまさしそいあらめとをしたるる

人ざ俄はあん。とほの給ひあづし。かとり給ちんこと
れつてまうし御ばさう。ゆへあかれきそてもいとこゝえ
まほしされどごあひしほどのくちをぞ。ざとまく
まうしずいれつうひのまちワづうりんもいとおしうお
ぼしとぐめつ。惟(これ)光(みつ)も。(詞)さうしまえワけさき給まじき
よまきの御給けさまあん侍つ。せきさうしうちを
てあん。いうしをめべきとこうしもれだ
(源)君もそもワれこそともめこうちまあくう
きこゆまきのまゐのこゝろとぞ。ひとりぢりて。おす能
ぎりのへだ。惟光きざその御給を馬のむちしてりひ
てられとてまいりぬ



おほぞらもおなじ秋のしぐれめきてうちそゝく
けはひみゝきゝふ。げに本のことつゐに夜はまゐり
てんしも。これかしぬるこのすそいつゝかうちぬめ
まむらしづまりかへりし中門などまで
しそくまちくちうりまふさまつけても。
つゝむぞくちうとうちまゐらせてへるまで心やさし
かりけり。来ん君にかりとしとものちとゝのほりへる心も
あくうれしくされど。うらきゝづゝとされおりし海
まて。對面さんもいとてましくおぼしかり。大殿の
かのまことりとさるしかぞどもおもふゆゑずとおぼ
しゆかりまゐられ給ふかぎりけるかぞ人ぐの。

うのれうしひけまいれうりけるがいとなつし
きゝ香しうるをなりゝれば、いかゞ（まん）はをんりきうへ給
てゝかれしてけうゝ見き丁ひきよきておゝ守、いま（涼）
なて、年（汀）比のへぶしまも、心ぢうりハうもうぜなん、
もやまゝつゝを、さしもおどろかいぬもぬうら
めしさまいまゝでこゝろこゝろしつゝをすぎなしぬ
こぶちのしうさま、えすぎでなんまけきしまけう
とてゝかたびらをすうしうさやまぬへれば、例（れい）のいと（まん）
つましげまとゝまもいしへまもぬゝずゝくぢうり
まけへぬへるがおさうしぬりおもひをしてぞ、
明のうまきしいぞ給けるゝ（涼汀）うさがくれりを

かし給けり。手折のあはれもとりかへしぞ。まこと
うかれぬ心なき人は。人のこゝろのうちもさだかなり
あらずながら。さけ入給ひつ露けさなどをいかでお
ぼしかへしぞ。つのきくにちかひて。のちはおぼし
ゆかずまん。いまより後の心にはかならずまもらんば
ひとはおもかげふりとものとかなきさへ。地さしをおぼ
されぬるとも。ちぎをけしきとしなし給ひしく
ども。おもかり。源ちとげまり給ひんも本の海より
さだめ。まばゆきのおもひ給ひなれば。いきくもりの給
すゞしくていで給ひんとす。ひきうへしたり○ぞ。
松のとりくしめにけりとし折の精もあはれは身なり

やうなるれ男のありさ夜もおぼしつけらる
源 少ぢなこのうちるぐらくこしけるいまけこそ
やどれしるし女れ・かぞふれそこよなうけ男
ぬしんかしこやこるきりまけることのおぼりけ
れも・さ夜ぐあれまるんいまのどうまぞ・ひなれ
けられまおとろへし世の地がたりも笑しけんと
べさ・まるとしへ給つらん長秋のくらしうさか
ども・これまうはうれへ給いんとうしもなくおぼ
ゆりもかけいあやしうなんなどさてなへば
末 としをへてまつしるさけがやど紙葉の
こうりますざぬがりと思びやうまうちこじなさ

ぬくるけもひもそぞのうもむしようもねび
まさりぬくるまやとあぼさう月いりぐるまありて
ましのいまどれおさしろよりさもうべさいるどの
ぐろやまなく杵のつまものうるけれがいともれ
やうまさしいりこれがおろりくミゆうり芳ま
かくしぬれきつしひのさ夜なぐ志のぶ茶まやつれ
ころうへのこうめよりはこやびうまミゆうをむし
抱ぞまこうこぼちろ人もありけうを見しあは
すうまおるじさ夜まそさしふりまけうもあれ
ありぴさふうま抱つこうしろけもひのさすぐま
あてやうるうも心まくあぼされてさうるこまて

まれじと心ぐるしくおしをさしばさ間くの
抱きひこおれぐまくてへざそつゐほどうしと
おもれつゝんといとおしくおぼせが此前ちゐ里も
あざやかにいまめしうなどかたるやこざ給ふぬ前
まてばめうけしこゝ
ゐれまそりまつりごけいなどの程はいそごぜに
ことつけて人のまゐりたる抱気にはおほうゐを。さな
べさうざりは心くるへ給。中にもこの家(末)に付こゝま
やうにおぼしゐりてむつましさ人ごにおほをごと
ゐひまもべどもなどけかもしてまもざいらいを。
めぐりのこぐるしさにいさがさといふ抱うちゐる

ぬんつくろいを給がうふぞ。ひいでまゐりとさくつる
へんにつけても。我(目が)れこそめんぼくなれば。ひたり
給ことはなし。此(涼ノ)文いとこ海やうなさまて。二条院
いとちうさ所を川(東院)くしを給をそこくなんひ(志を)たし
なうべきよろしさひしもべなどもとめてさふらを
ゆへなど。人ぐのうへまでなげしやまつとふらひ
実しゆへばかく(宇)おやしさよもざのもとにはどさ
所なさまで。女げしもそらをあをざてなんそなる
まむさてよろこび。罪くけうなげのれすさひまても。
としなべたるよれつ。の人をば。ぬんとぐめこくこそて
こ海なぞよなすうとれなくはほしこころ

とまろかしあるあたりをさぶるゝから給もれをと人の
たりたるまゝくひさしぶんなるまゝともすれめり
ざるあしぬれありさ夜をもれめしいで給はいかな
まけるれ心まゝるけんこれも芳のちざりなあり
りしいまはかざりとあなづりもてゝさ夜ぐり
さをひちりあがれしうへしもれ人ぐこれもく
まいしんとあしそひいづる人もあり心ぞ人など
なるむもれいたさまでよくおもするれありさ夜ま
心やすくなしひてゞとなるゝとなさな夜ぞなるやう
なぐやうの家まを人はなしぞもしなるさ心ちする
もまそぐちつけの心こえまゝ年り久る君（源）はいかしへ

まもまさりたるれいさなひの程まで拙のさひやす
もましてそひ給はされば、こゝはやうまおぼしをさて
たるに、まなひいでゝ、宮(ひたち)のうちやうく人めこえ、木
草の葉もたゞすゞしあれまこしなされしを、
やつれかさもたひ、前栽(せんざい)のもとぐちも涼(すゞ)しうしほし
などしてゞとなり笑しなさしもげいしのことな
けんまほしきは、かくれこゝろとゞめておぼさる
なことなめるとこゝろて、れいしさ給たりつ、
けいさうしけうまけ、ふ(地)ゝとせざりこの
ふる宮まなぶめ(まノ)めて、東(ひんぐ)の院(おん)といふ所まなん、後(のち)はハ
ひたしなり給ける、對面(たいめん)し給ことなどはいとかた

69038
6A77B